

予定調和



新井 宏

精神活動における心地良さの原点は、予定調和にある。もっとも、予定調和などという哲学用語の意味を知って使っているわけではない。それは、どこかで聞きかじって使っている内に、私の頭の中だけで、勝手に育った概念である。

私の意識する予定調和とは、過去の記憶が刺激されて、次に何が起るか期待する心の動きが生れ、そして期待通りの具象が起った時に生ずる「心の安らぎ」のことである。

例を挙げれば、テレビの水戸黄門である。筋書きは分かっている。ここにおわすは、前の中納言、天下の副将軍、水戸の黄門様であらせられるぞ、下におろ」と葵の印籠を見せるところで劇は終る。偉大なるマンネリと言われても、人氣が衰えないのは、知っていることが予定通りに起こり、予定通りの結末にいたり、その間、見る者の心に予定調和を生じさせ続けているからである。巨人の勝った翌日のスポーツ誌が確実に売れるのも同じ

類であろう。誰でも、結果を知っていることを再度楽しむのである。

かように、人は、自分になじんだ世界に調和する情報や事柄を好む。しかし、だからと言って、そこに知的な緊張感がなければ、退屈してしまう。時には、次に何が起るか期待する心に、新鮮な意外性や驚きを付け加えなければならぬ。その時に「心の安らぎ」に加えて「心の弾み」が生まれる。

例えば、川端康成の『雪国』の有名な冒頭の文章は、
……困境の長いトンネルを抜けると雪国であった。
夜の底が白くなった……とある。「夜の」の次に「底が」とくる意外性に加え、それが「白くなる」と結ばれる表現に、読者は引き込まれ、心が弾むのである。

おしなべて、小さな緊張感が随所にちりばめられた予定調和が心地良く、それが文章なら名文となるようである。そして、どのような情報や出来事に対しても、予定調和し得る心の自由度を確保できた時に、人生は楽しい

のではなからうか。

以下は、そんな意識を雑然と書き溜めた「予定調和」に関するメモである。

童話

子供は、何回でも何回でも、同じ昔話をせがむ。同じところで笑いこけ、同じところで涙ぐむ。大きなかぶを引き抜く他愛のない童話であっても、主人公の子供が、「うんとこしょ、どっこいしょ」と引張ると目が輝き、「まだまだかぶは抜けません」というところで、ゲラゲラと笑う。次に妹を呼んで来てふたりで「うんとこしょ、どっこいしょ」と引張るが、「まだまだかぶは抜けません」で、またまた笑う。かくして、次々に十人で、「うんとこしょ、どっこいしょ」と引張るまで、延々と笑い続けるのである。

お気に入りの作者ができる、片っ端からその作者の本を漁るのもその類である。誰でも知っていることに調和する話が好きなのである。

旅行

旅行もそうである。一度楽しい想いをすると、類似の体験を求め続ける。旅行で見たこと、味わったこと、覚えたことなど、それらに関連したことがテレビや新聞にでも出てくると、にわかに脳細胞が活躍しはじめる。知っ

ていることを再確認するプロセスで、脳細胞は自己の勢力を増殖して、新たな領域を開拓して行くかのようである。

だから、旅行のガイドブックは、旅から帰ってから読むのが良い。事前に読んでもさっぱり面白くなかったことが、心地良く頭に入る。

音楽

母の胎内で聞いたメロディーは、意識下にはなくとも、懐かしさ呼び起こし、豊かな心地をもたらず。眠っていた脳細胞が、出番がきたとばかりに張り切り、基層の記憶に新たな記憶が調和する。

どんな名曲だって、初演の時はそれほど好評だったわけではないと言う。初演で好評を博したのは、交響曲のように主題が繰返し現れ、終章に至るころには耳になじんで、曲と聴衆の間に一体感が生れ、予定調和を生じた場合など、むしろ特殊な例なのである。

歌謡曲も、繰返される歌詞とメロディーが必須の条件で、そこに華やかな変化が加わると、時に名曲となる。

ぼけ老人の治療に、ナツメロが極めて有効なのは、眠っていた細胞に出番が与えられるからである。

味覚

おふくろの味が忘れがたいのも、予定調和の一種であ

る。知っている味に巡り合うと脳細胞が歓喜の声をあげる。だから、どんな味にも慣れるにせずである。

映画

かつて、海外に出かけることなど夢の時代に育った世代は、その頃見た映画に異様な思い入れがある。だから、絶対訪れるはずのなかった、映画の場面を目の前にして、若干の失望を伴いながら歓喜するのである。青春が甦るのである。

容貌

俳優の容貌だって、しかりだ。多少壊れたところのある顔立ちでも、ストーリーに引き込まれると、次々呼び起される時は、もう欠点が魅力になっている。癖のない顔など、深みがないなどと思うようにさえなる。

そのようなことでもなければ、映像の世界の中で、美男美女を仮想の友として育った現代の若者は不幸である。周辺にいる現実の恋人予備軍は、どうしても見劣りしてしまうのではないか。もっとも晩婚化の傾向に、その憂いなしとしない。

運動

予定調和の世界は知的な面ばかりではない。身体を動かす世界も同じである。かつて身体が覚えたスキーやダ

ンスや水泳など、どんなスポーツも、名選手のプレーを見ただけで、心が高ぶる。まして、自分で身体を動かして再体験した時の心地よさは、小脳の細胞が一斉に歓喜の声を上げているかのようである。歳をとっても、泳ぐのが良いし、自転車に乗るのが良い。脳細胞が喜んでくれる。

アジテーター

アジテーターの才能は、聴衆に予定調和を巧みに起させる能力にある。聴衆の知ってる分かりやすい事実を、ロンドのように繰返しながら、ちょっとづつ変化させて、自己の主張につなげて行く。繰返しは、あまりに単調であってはならず、かと言って聴衆が付いて行けないほどの飛躍があってもいけない。聴衆が、次にどんなバリエーションが現れるか、読み取れるようになった時に、聴衆は調和し共振し酔い、アジテーターが完成するのである。それは、予定調和の心の動きが、アジテーターの論理に取込まれる瞬間である。

教育

そして、その極まりが教育である。物を覚える過程は、それ自体が予定調和の世界である。どんな子でも、その子の知ることが刺激された時には、その近傍の脳細胞が活性化する。活性化した脳細胞こそ、喜び勇んで

新しい知識を吸収するのであって、チンプンカンブンな基礎の上に、いくらシャワーのごとく、新知識を浴びせても、混乱を招くだけで、やっと思えたことさえ、あやふやになるのが関の山である。

だから、優秀な教師は、どんな高度なことでも、その子の知っているレベルまで戻ってから話を始める。知っていることを五つ話してから、六つ目に応用問題を出すと、どんな子でもクイズの答えを求めて活性化する。そして、もし答えがうまく当りでもすれば、もう立派な予定調和の世界である。当たらなくても、次のクイズにチャレンジしようという心の動きが起こり、七つ目の問題に目を輝かす。その時、正答できる問題まで戻ってあげれば、もう子供の心を完全に掴み得る優秀な教師である。高度なことを教えなくとも、知っていることを繰返し刺激し、再確認させるプロセスで、予定調和が生れ、かつての知識が確実になり、更にはその周辺に新たな知識が付け加わって行くのである。

精神分裂症

でたらめができない。どうしても整然としてしまふ。順番を変えられない。これが精神分裂症の典型的な症状のひとつだそうである。例えば、一から九までの数字をでたらめに言ってくださいと言われても、精神分裂症者は一二三四と順番にしと言えない。回復してくると、

一の次に九とか、できるだけ離れた数字を言うようになる。精神分裂症とは、整然とした予定に対して、整然と調和しようとする心の動きが極めて強い状態なのである。その状態にしか心の安らぎがないのである。換言すれば、心の自由度が失われ、調和し得る能力が極度に低下した時に、精神はバラバラに対応せざるを得なくなり、分裂せざるを得なくなる。

百名山

一二三四あるいは一二四八と続く数値の次の数値を当てさせる問題は、算数好きを育てる好例であるが、世の中には、深田久弥の百名山と言うのがあって、その百名山の完登を目指している人種が数多くいる。山好きの者が、ある時、登った山を数えて見て、その中に百名山が三、四十もあると、必ず感染する症候群である。初夏の花の美しい山に秋に登り、紅葉の映える山に春登っても、ひたすら百名山のコレクターたらんと努力する。

四国八十八ヶ所や秩父三十四ヶ所札所巡りや、サンチャゴ・デ・コンポステラの巡礼なども、予定調和の一種であろうか。とにかく、始点から順次廻って、終点に至らないと気が済まない。何かの事情で、途中が欠けてしまつと、執念を以って再挑戦して、完遂しようとする。だから、昔から、人を引き付けるには、すべからず、数をつけるか、連番をふるに限る。

マニア

マニアックなコレクターは必ず数を誇る。ある時、たまたま五十円玉が小銭入れに五、六個入っていたのがキッカケで、五十円玉を集め始めた男がいる。最初は買い物をしてお釣に五十円玉があると貯金箱に放り込むだけであつたが、その内に五十円玉のお釣が出るように工夫して買い物をするようになる。電車の切符を買う時も、わざわざお釣が五十円になるように調整してコインを投入する。そして溜めに溜めた五十円玉が一万个になつても止められない。しかし、そんなささやかな行為でさえ、予定調和を築しめるのである。

若者

若者は、ひとつの理論や法則を覚えると、何でもその方式で世間を割り切ろうとする。これが若者の正義感である。ある意味では、精神分裂症のようなものだ。でたらめができないのである。

正義

世の中に、正義ほど厄介なものはない。正義など、単に「予定調和」の一念に過ぎないのに、それを信奉している者にとっては、調和せざるものが全て敵に思えて、妥協ができなくなる。多くの民族紛争、宗教戦争そして

嫁姑戦争が、この正義の厄介さに根ざしている。汚職は国を滅ぼさないが、正義は国を滅ぼすと言うではないか。だから、正義と精神分裂症とは相通じるところがある。

サラリーマン

かつて、日本のサラリーマンは、自分の会社に忠誠心を持ち、会社の言うとおりにコツコツ働いていれば、将来にわたって生活を保証してもらえた。だから家庭のことなど一切かえりみず、残業に異をとなえることなく働き、転勤命令が下れば、黙って任地に赴き、多少法律にふれることでも、ためらわずに会社のためにやった。

その代償として、会社は一生めんどろを見てくださいという予定調和の人生こそ、日本企業の最大の特徴であつた。予定調和が成立たなくなった日に、サラリーマンの悲劇が始まつた。

老人扶養

かつて、子が親の老後を見る。これが約束ごとであつた。もっともその頃、病床で長生きすることなど、めつたになかつた。ところが、医療技術の進歩は、病床での長生きをもたらし、個人の負担には耐えられないほどの状況を生み、税を通じて、社会が老後の面倒を見る時代に移行しなければならなくなりつつある。そして社会としての予定調和に混乱が起つている。

経済と政治

かつて、市場機構を自由放任しておく、社会はもつとも幸福な状態に行き着くという古典経済論の「予定調和」説が流行した。政治の世界でも、個々には社会全体のことなど考えずに選挙が行われても、それが繰返され総合されるなかで、最大多数の最大幸福が達成されるとする「予定調和」説が、近代デモクラシーに理論的な根拠を与えた。

このような概念は、さかのばれば、ライブニッツの予定調和説である。自然界では、偶発的にバラバラに事柄が起っているが、いずれも神の定めた予定（宿命）にしたがって、必然的な調和に至るとする考え方である。調和とは、多様における統一のことにほかならぬ。

道徳と科学

神は、善きことをなした者を救済し、悪しきことをなした者を救済しない。人々はどうしてもこう考えたがる。そう考えないと、社会に道徳は成立せず、崩壊に向かうからである。しかし、この予定調和が成立つ世界の人々は幸せである。

十九世紀の科学者、ハックスリーは、科学の悲劇は、美しい理論を醜い事実で殺害することだと言っている。美しい仮説は醜い現実と裏切られる。

神は、善きことをなしても救済するとは限らず、悪し

きことをしても救済することがある。それは、神が一方的に断罪することであって、天地創造の時に決まっており、人智でくつがえすことができない。こんな思想がユダヤ教やイスラム教そしてキリスト教にはある。

言葉

アナウンサーは、いま読んでいる所のはるか先の文章にいつも目をやっている。決して一語ずつ読んでいくわけではなく、一息でしゃべれる分量の文章が、脳の中で予め音声に変換されていて、口はそれをなぞっているだけなのである。一種の予定調和の世界に良く似ている。だから、どんなベテランアナウンサーでも、予定調和を起さぬ悪文はすらすら読めない。予定調和を拒む名文もすらすら読めないのである。

外国語

言おうと思ったことが、脳内で言葉となって、それから口から発せられている内に、脳が次の言葉を作り出せなければ、物理的に会話は続かない。なめらかに喋るとは、脳内の拘束を離れて、口から音が勝手に出る状態を意味している。だから、無意味なフレーズでもいくつか暗記して、勝手に口から発せられる状態を作ることが、外国語上達のコツのようである。そして、聞き取り能力は、次の言葉が予測できるように予定調和が始まって完成す

る。

本歌取

有名な古歌の表現をとりいれ和歌を構成し、その古歌の世界を背景に表現・情趣の重層化や複雑化をはかる作歌技法。漢詩の世界にも似た技法があると言う。

接続詞

私の書く文章は、直接間接を問わず接続詞の連続である。そのことに気付かされたのは、かつて気になじまぬ論文を書いて、読み返すのも億劫になり、心安い部下に、文だけでも整えてくれと頼んだところ、ほとんど全ての接続詞をカットして持ってきたことがあったからである。折角、直してくれたものなので、そのままにしてしまっただが、あとで読むと、それでも十分に意は通じている。

そして、なぜ接続詞が多くなるのか自問してみても悟った。文に遊びや余裕がないのである。そういうと、さぞかし名文かと誤解されようが、事實は逆で、書き手の考える筋道を、読み手が勝手に踏み外さないように、執拗に誘導しようとしているからなのである。

それは、ある意味で論理的な記述には適しているかも知れないが、詩や小説には全く不向きである。せつかく読み手の共感を呼び起こしたとしても、おせっかいにも読み手の心に遊ぶ余地を与えなければ、味わいなどが生

まれるはずがない。次に何が書かれているか容易に分かるような文章は、金をはらって読むに値しないのが道理である。かくして、若い頃から物書きに憧れながら、未だ小説を書けないでいる。

自己評価

人はそれぞれ、自分に対して、自己評価をくだしながら生きていく。それと同時に、自分が周囲からどう見られているか一を気にしながら生きていく。普通、自己評価と他者の採点が大きく掛離れることはないが、その差が大きくなると大変なことになる。たとえば、鬱病になる。予定調和による心の安らぎが得られず、心のバランスが崩れてしまうのである。

自己評価はやめ、現実をありのままに受け入れる。これが最適な処方箋だという。しかしこれは、悟りの世界であり、凡人のなせるわざではない。それならば、自己評価にも多様な世界を取り入れてはいかがであろうか。他者の評価さえ、自家撞着の世界にしてしまえば、心に安らぎが戻ってくる。

ストレス

あるべき姿と現実との差がストレスの原因である。現実をありのまま受け入れれば、ストレスは生じない。だがそれがむずかしい。もっともストレスのない人生なん

か、何の意味もあるまい。

話術

知っていることを聞くのは心地よい。その極まりは、自分のことが話題にされる時である。誰でも自分のことは一番良く知っている。その自分のことが、話題になれば、良かれ悪しかれ脳細胞が刺激される。だから、話題が途切れて、間が持たない時には、相手のことを語るに限る。これが話術の要諦である。

比較

人をおだてるのは簡単だ。他人と比較すれば良い。人を傷つけるのも簡単だ。他人と比較すれば良い。ただし比較対象者をまちがってはならぬ。

初心者

何事であれ、初心者ほど早く進歩するのが道理である。それなのに老人は、過去の世界に閉じこもり勝ちで、初心者の所まで降りて行きたがらない。だから予定調和の世界を増やせない。新しいことを始める。それが若さの証拠なのである。

知識の増殖

知識や情報の世界は、間違えなく複利計算を越えて、

成長拡大する。シャワーのごとく降り注ぐ情報が、手持ちの知識に比例して歩留るのは、当然として、異質の知識や情報が合体すると、新たな知識や情報を生み、加速度的に保有する知識を増大させるからである。すなわち、知っていることに調和する知識だけが、知識の増殖過程に取込まれるのであるから、知識に対する初期投資を惜しんではならない。

夫婦

世の中の奥様方には、どんな様との旅行などまっぴらだという方が多い。もっともだと思う。しかしもったいない話だ。ふたりの経験は自乗で楽しめる。一緒に見た風景がテレビに出てくれば、トイレまで呼びに来る。

成功

成功者のまねをしたら必ず失敗する。同じ事しても百人に一人も成功しないからだ。しかし成功者はもう一度同じやり方で成功したがる。それが予定調和して心地良いからだ。そして失敗する。

会社

会社を失うと予定調和の世界を失ってしまうひとがい。恐ろしいことだ。